

水稲作の担い手と産直向け野菜の経営 ～地域の将来を見据えて、今岐路に立つ～

瀬戸市 矢野和宏さん

水稲・サトイモ・サツマイモ

【平成 29 年 3 月 21 日掲載】

市街化が進む瀬戸市において水稲、サトイモ、サツマイモなどの栽培を行い、地域の水稲作の担い手として作業を請け負いながら、農産物直売所への野菜の出荷にも精力的に取り組む矢野和宏さんをご紹介します。

Uターンで就農

矢野さんは、大学卒業後 28 歳まで、自動車販売の営業をしていました。平成 12 年に一念発起して実家の農業を継ぐことを決め、これまで営業職で培った対面販売のノウハウなどを農業でも活かしたいと考えました。就農当時の矢野家は、水田と畑を合わせて 8 ha 管理し、大半を市場出荷していましたが、矢野さんが就農後しばらくして、隣接した長久手市に農産物直売所（以下「産直」という。）その数年後に瀬戸市内に道の駅ができたのを契機に、これらの産直に野菜を出荷するようになりました。



矢野和宏さん

産直では「物売るより名前を売る」

産直出荷は市場出荷に比べて、袋詰めや複数か所への出荷などの手間が増え、さらに、価格設定やデザインなど販売面でも個人の負担が増えます。しかし、矢野さんは、就農前の経験が活かせる絶好の場面であると、積極的に取り組みました。産直では「物売るより名前を売る」ぐらいの意気込みが必要と考え、他の生産者に先駆けて名前を記載したオリジナルシールを貼りました。また、初夏～秋はナスやキュウリ、秋～春はサツマイモやサトイモと、一年を通して何らかの野菜を出荷することで名前を覚えてもらい、固定客を確保する工夫をしています。産直では、サツマイモとサトイモの需要が大きいため、昨年度まで各 50～60a であった栽培面積を今年度から各 1 ha に増やし、サイズや品質を見極めて産直に出荷しています。アルバイトを 8 名雇用し、出荷調製までは任せますが、「自分の名前を付ける以上、最後の確認は自分でしたい。」と、袋詰めとシール貼りは矢野さんが自ら行っています。



産直の商品に貼る
オリジナルシール

水稲作の担い手としての責務

市街化が進む瀬戸市では、宅地や商業地が多く、小面積の農地が多く存在します。また、そのほとんどが兼業農家の農地であり、水稲作の担い手は瀬戸市内に数戸しかいません。「水田の管

理も産直向け野菜栽培と同じくらい楽しい。きれいに早くがモットーで、地域の水田をきれいに耕うんしたり、収穫し終えたときは気持ちがいい。」と、積極的に行っており、作業受託の面積は年々増えています。特に、乾燥・調製作業については、毎年約 90t を乾燥しており、水稲の収穫期には、矢野家の所有するライスセンターにかかりきりとなります。地域の兼業農家の人たちも「矢野さんが作業を受けてくれるから水稲を続けられる」と話すそうです。



近隣の水田は小区画が多い

今、岐路に立っている

数年前、経営主である父正彦さんが、その年の水稲の収穫が終了した数日後に突然倒れ、何か月もの入院生活を送ることになりました。そのとき、矢野さんは、水稲作の担い手と産直向け野菜栽培の両方をやっている今の体制を見直すときがきた、と強く感じました。幸い父は回復し、農作業もできるようになりましたが、現在の面積の作業受託を続けるには、野菜を辞めなければならず、産直の野菜を選ぶならば、作業受託を辞めなければならないと思案しているところです。瀬戸市に数戸しかない水稲作の担い手の矢野さんの選択は、市の農地問題にもつながるため、市が運営している農業塾に担い手養成について相談するなどしており、これから具体的に動きたいと話してくださいました。



W C S 用稲の栽培状況

また、どちらを選ぶとしても労働力不足となることへの対策として、W C S 用稲の作付けを増やしたり（収穫以降の作業は畜産農家を実施）、野菜の畑売り（収穫以降の作業は流通業者が担い、収穫後は土地を戻してくれる）を実施するなど、様々に取組を進めています。岐路にいる矢野さんを取り巻く環境を受け止めつつ、進むべき道を模索している姿が非常に印象的でした。

市街化が進む地域だからこそ理解促進が重要

「子供も含め、地域の人に農業を理解してもらえ環境で仕事ができるようになりたい。」と話す矢野さんは、「楽農まつり」という収穫イベントに 10 年続けて協力するなど、農業を身近に感じてもらい、また、自分が食べている農畜産物が農業によってもたらされていることを実感してもらう取組を様々に行っています。矢野さんの栽培するナス、サツマイモ、サトイモは市内の学校給食に使われていることから、先日は小学 3 年生に出前授業を行い、「豚や牛だけでなく、米や野菜についても、命をいただいている。」と伝えました。市街化が進み、日々の農作業が年々しづらくなっている地域だからこそ、「一つの職業として農業を一般の人に認識してもらう必要がある」と話してくださいました。

現在は岐路に立っていますが、将来的には「オペレーターも野菜もできる法人を作りたい」と、夢を力強く語ってくださいました。地域の変化に対応しながら、様々にチャレンジしている矢野さん、きっとその夢を実現なさることと期待しています。

執筆：農業経営課

取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課